
Lostpowers2

東 孝太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost powers 2

【NZコード】

NZ8572X

【作者名】

東 孝太

【あらすじ】

「情」を多く持つ悪魔の主人公、ウェルギウス＝ルシファーは、人の少女と出会い、少女と旅をした。

そして、世界を守り命を落とした。

主人公の居なくなつた平和な世界。その世界では悪魔たちによる「終末」が始まりつつあつた。

第1stage 始まり

アルスの死から一年の時が過ぎた。

世界は零とゞが誕生する前のいたつて平和な世界に戻りつつあった。そもそも平和とはどのようなものなののははつきりしていないが、零とゞが存在していた時のように毎日が恐怖に包まれていることはなくなつた。言つならば以前よりは平和になつたと言つべきである。

そんな平和な世界で高校に通い、2年生となつた姫坂雪音はある学校の2・Aという教室の中で窓側の前から3番目にある自分の椅子に腰をかけ、机に肘をつきながら意味もなく窓の外を眺めていた。桜の花びらが空を舞つている。

「ゅーきねつ！」姫坂は突然後ろから何者かに声をかけられた。

「その声は水玉か。なんだ？」姫坂はそう言いながら視線を窓から自分の後ろに立つ人物に変えた。

女子高校生で2年にして身長170cmという高い身長を持つ黒髪ショートヘアの野球部のマネージャーの少女。数多い姫坂の友人の中では3番目に入るほどの仲だつた。名前は水玉萌みずたまもえである。

「なにほんやりしてんの？もしかして好きな人が出来たとかあ～」水玉はからかうように言つた。姫坂は表情一つ変えず、冷やかに否定した。水玉は肩を落とす。

「じゃあなんでそんな上の空なの？」霧島はため息をついて行つた。雪音は別に、とつまらなそうに言い、自分の机から教材を出した。

「それよりもあき。宿題やつたのかね？前回も前々回も宿題を忘れただろう。今回忘れたら呼び出しをくらうかもしれないぞ」姫坂はこれ以上発展しないと思い、話題を変えた。姫坂にいきなり話題を変えられた水玉はいやな顔一つせずむしろ自慢げな顔になり、腰に手を当てて笑つた。

「ふつふつふ～。ちやんとやつてきたのだよ！ほらね～」霧島

はそういうと雪音の右斜め前の自分の席から一冊のノートを取り出し、雪音の前でパラパラとめくつて見せた。

「それは国語古文のノートだる。今回の宿題は数学？だぞ」姫坂が冷たい声で言った。霧雨の手からノートがパサリと落ちる。

「馬鹿だなあ君は。ノートを貸してやる。【与すか何かしてやり過ごすんだな】雪音が霧雨の手にノートを押しつけると、姫坂は力なく受け取り、ふらふらと自分の席に向かった。

ふう、と姫坂はため息をついた。そしてまた視線を窓の外に変えた。桜の花弁と共に蝶が優雅に飛んでいる。

（やはり足りない）姫坂は心の中で呟いた。

（アルスは今頃天国・・・いや悪魔だから地獄か）

（地獄で何やつていいのだろうな・・・）姫坂の黒い髪に窓の外から吹いてくる風が当たり、なびく。床に落ちている姫坂のノートも風に吹かれ、ペラペラと音を立てながらめぐれる。世界には春が訪れようとしていた。

第2 stage 春風とともに

授業を終えた雪音は霧雨にノートを見せてくれた礼に映画のチケットを手渡された。最新作の映画だったことと、特に断る理由もなかつたので姫坂は受け取った。

水玉は姫坂に集合時間を告げると時計を見て時間だ、と呟いて、姫坂に別れを告げて駆け足で去つて行つた。雪音も他の友達に別れを告げ生徒会室へと向かつた。

姫坂は零との脅威から世界を救つた英雄という事になつていて、その正義感を買われて生徒会に入つたのだ。役柄は副会長である。生徒会長は面倒なので断つた。

姫坂は生徒会室に到着し、扉を開くとその扉の向こうで広がつていった異様な風景に目を疑つた。

誰もいないのだ。

会長どころか書記も会計もだれ一人いない。鞄自体は置いてあるが誰もいないのだ。もし生徒会室以外での活動ならば、机の上に連絡を伝える紙が置いてるが、それもない。

「どこ行つたんだ？」姫坂は呟く。外を通つたバスの走行音が部屋に響く。

姫坂は鞄を自らの机に置くと椅子に座つた。孤独という名の沈黙が続く。

（眠い・・・）

姫坂は暇による睡魔で机に顔を伏せた。そして眠りに就いた。

*

姫坂が目覚めると辺りは真つ暗だつた。時計を見ると夜の8時。しかし生徒会室の机には相変わらず会長を含め他のメンバーの鞄が不気味に佇んでいる。周りは驚くほど静かだ。

「何かおかしい・・・」姫坂は呟いた。姫坂の肘が当たり、鞄が倒れた。姫坂は埃だらけの床に転がった鞄をつかみながら呟いた。

「探すか・・・。何かおかしい」ことが起きているみたいだ」姫坂は

鞄をゆつくりと持ち上げ、机に置くと、部屋を後にした。

右と左の廊下は両方とも不気味な闇と窓から注ぎ込む月光によつて
縞模様のようになつてゐた。左廊下の一番奥は深い闇のようになつ
ていて飲み込まれそうな雰囲気を感じさせる。姫坂はその闇に生徒
会室にあつた懐中電灯を照らした。何もないただの壁がたたずんで
いる。

怖い・・いや怖いと思つから怖く思つんだ。お化けなんかいない

姫坂は一人で呟き、そして歌い始めた。
「唄くばーうつ 二つ二つ二つ 唄くばーうつ

「んもんもん」 嘸声だけが廊下に響く。

姫坂が歌い終わつた瞬間、ドンッ！という音が響いた。姫坂が鳴ら

した音ではない。その音の発信源は右廊下のすつと奥だつた。雪音は唾をのみ懐中電灯を持つたまま右の廊下へと進んだ。音は次第に大きくなつていいく。

姫坂は4つほど教室を越し、音が一番大きく聞こえる奥の部屋。美術室へとついた。音は相変わらず響いている。

姫坂は深呼吸をすると、扉を開けた。

美術室には何もない、いつの間にか音はやみ、彫刻が月光で不気味に影を帯びて佇んでいる。

「何にもない・・・・・そんなはず・・・・姫坂は咳き、後ろを振り返り戻り戻りうつとしたその時、自らの背後に気配を感じ振り返った。

ゴンシ

美術室に鈍い音が響き、姫坂の身体は床に倒れた。

*

「さね・・・ゆきね・・・雪音つ！」

姫坂は何者かに揺さぶられ、かけられた声によつてゆっくりと目を開いた。田の前には縄に縛られた会計の郷浦咲子となんとか縄を外そうとしている品川誠（しながわ誠）が、その後ろに書記の山本康介と泣きそうな顔の久保美咲がいる。姫坂は生徒会全員の所在を確認すると、ゆっくりと立ち上がつた。殴られたからか頭が痛い。

「なんか生徒会の活動中に皆寝ちゃつて・・・気付いたらこの部屋にいたの・・・雪音はそうじやないみたいね・・・。そのごぶ、殴られたの？」郷浦は頭を押さえる姫坂を心配しながら自分たちがここに連れてこられた経緯を話した。姫坂はどうやらそのようだ、と呴いて自分の手元を見た。

-縛られている -

姫坂は周りを見渡した、見たことのない部屋だ。学校にこのような教室は無い、と姫坂は呴く。郷浦も確かに、と返事をすると品川が縛られた手で地面を叩き、「誰がこんなことを！」と憤つた。

「あわてるな。この状況を打破する方法を考えるんだ」

そういうのは生徒会長の山内秀だ。だが山内はどこか落ち着きがなく、そわそわしている。本人も恐怖を感じていてるのだろう。

「この状況を脱出する何かを考えなくてはならないな。みんな、とりあえず空いてるドアが無いか調べてくれ」姫坂が冷静に言った。他のメンバーもその考えに賛成し、よろめきながら立ち上がつた。

カラカラカラ

生徒会のメンバー達がいままさに脱出方法を探そうとした時に部屋の左奥の扉が音を立てながらゆっくりと開いた。6人に緊張が走る。「やつと気がついたか生徒会イ」男の声と共に誰かが扉をくぐつて部屋へと入ってきた。

「山部先生・・・どうしてこんなこと」郷浦が不気味な笑みを浮かべる教師に震える声で言った。

「あることの為に集めたんだよ。ある作戦の為にな」山部はゆっくりと生徒会まで近づく。その姿を見て、姫坂は生徒会のメンバーの一番前に飛び出した。

「なんだ教師よ。作戦？私たちに何かするつもりか？レイプなんかしてみる、肉片ひとつ遺さず殺すぞ」姫坂が獲物を狙う肉食獣のような目で山部を威嚇した。しかし山部はまったくひるまずに、不気味な笑みを浮かべたまま雪音の前で立ち止った。

「違う。俺が用るのはお前だ・・・、姫坂ア」山部は雪音の胸倉をつかみ上げた。郷浦が「雪音！」と叫ぶ。山部はポケットから真っ赤な石を取り出し、雪音に見せると質問をした。

「これ？何だと思う？普通の石じゃないんだがな」

「知らない！なんかの宝石か？」姫坂が必死に脱出を試みるが、縛られた手では、山部の手から脱出することが出来ない。

「魔石だよ」山部がその石の正体を告げると、姫坂は驚愕し、抵抗する手を止めた。

「嘘でしょ・・・魔石って・・・」

「残念ながら嘘じゃねえんだ、これはお前がつぶしたSの社員だった外崎さんから配布された魔石。なんで外崎さんが魔石を持つてるかは言わねえけどな」山部は姫坂をつかむ手を緩めた。姫坂は床に転がった。郷浦達が駆け寄り、姫坂をかばうように前に出る。

「雪音H・・俺の作戦つーのは、外崎さんから頼まれたんだ。お前を殺せつてな」

「なら！」床に倒れている雪音が山部を睨みながら言ひ。「生徒会メンバーは関係ない！逃がせ！」

「ああ・・・生徒会メンバーが何故集まつてるかって？」山部が魔石を光らせて言ひ。

「こいつら全員殺して、お前に最高の絶望をさせてもらいながら死んでもらつためだよ」魔石が光ると、教室の影が盛り上がり、黒いオオカミのようになる。久保が「ひつ！」と声を漏らしておびえる。

「殺れ」山部が小さく呟いた。黒いオオカミはその声を聞き、郷浦に飛びかかった。姫坂がなんとかオオカミを追い払おうとするが、オオカミは郷浦にのしかかり、抵抗する郷浦の首にかみついた。

郷浦はしばらく抵抗していたが、動かなくなる。姫坂が憤慨し、オオカミに飛びかかるが、オオカミはいとも簡単にかわし、山内に飛びかかると、一瞬でのどにかみつき、黙らせた。

泣いている久保にもオオカミは飛びかかり、その牙で息の根を止め。品川と山本は2人で力を合わせオオカミを攻撃し、影に戻すが、魔石の力で山部が作り上げた闇の刃により、貫かれて周りを血の海にしながら動かなくなつた。

「うわああああああつ！」姫坂が涙を流しながら憤慨し、地面をたたいた。山部が高笑いし、雪音を見下した。

「さあ、最高の絶望を合わせたところで死んでもらうか」山部が闇で作り上げた刃を雪音に向けた。雪音は刃を蹴り飛ばし抵抗するが、刃は消しても消してもその姿を作り上げ、姫坂の頭に向けられた。

「じゃあな、世界を救つた英雄さんよ」山部が刃を振り下ろした。刃が今まさに姫坂を切り裂こうとした瞬間に、教室の窓から何者が飛び込むように入ってきた。教室に入ってきた何者かは山部を蹴り飛ばし、地面に足をついた。

山部が壁に叩きつけられると、周りにあつた生徒会メンバーの死体は消え、何もない教室だけが広がつた。

「大丈夫でしたか？」入ってきた何者かが姫坂の手の縄をちぎり、声をかけた。姫坂はその声に聞きおぼえがあつた。

「あ・・・アルス！？」

第3 stage Lost memory

「ア・・・アルス？」姫坂は突然現れた存在しないはずの青年に驚きが隠せなかつた。目を丸くして目の前の青年を見つめ、混乱するとしていた。彼女の頭の中は真っ白だつた。

青年の顔は窓から注ぎ込む月光に照らされ、次第に明らかになつていつた。

「やつぱりアルスだ！」青年の顔が完全に見えたとき、姫坂は笑顔でいつた。

「でも君は死んでいたはず・・・。どうやって生き返つたんだ？」姫坂の言葉に対し、青年は無言である。青年の視線の先にあるのは姫坂ではなく山部であり、姫坂という友との再開を喜んでいるようではなかつた。

「おい！？なんで無視する？ アルスっ！」

姫坂は青年の胸倉を背伸びして掴んだ。

青年はいきなり胸倉を掴まれたのでひどく驚き、目を白黒させながら姫坂を見た。

「すみません・・・あなたは誰ですか？アルスって言つるのは私の名前なのですか？」

青年の言葉に姫坂は思わず手を離した。

「アルス・・・何言つてるんだ・・・。冗談でも怒るぞ！」姫坂は声を震わせて言つた。しかし青年の目には嘘をついてるような困惑いはなく、真つすぐな目だつた。

「何『じちや』じちやとやつてるんだ？」姫坂がもう一度アルスに掴みかかるうと、したときに先程攻撃を受け、飛ばされた山部が瓦礫を退けて立ち上がつた。

「危ないから下がつてて」青年は自分の前にいる姫坂を手で押しのけた。

「ねえ！ アルス！」姫坂は目淚を浮かべて叫んだ。アルスが姫

坂の言葉に振り返る。

「すいません」アルスはそれだけ言つた。そして手で空中を叩くよ

うな動作をした。

「影剣」シャドウ青年はそう呟きながら闇をまるで物体のように引き延ばし、

真つ黒な剣を作り出した。

「命まではとりません。安心してください」青年は冷たい表情でいつた。

「ほざけ！ クソガキが！」山部は青年まで素早く移動し、ナイフを振るつた。しかし、青年はいとも簡単にかわし、影で出来た剣で山部を突き刺した。

山部は悲鳴をあげて、ナイフを落とした。

「終わりです。弱い人だ」青年は影の剣を落とした。地面に触れた剣は床の闇に溶け、消えた。

「クソガキがああ・・・・」山部は魔石を光らせた。

「無駄だつていつてる。俺はお前を殺したくない。早く降参して帰れ」青年はため息をついた。

「絶対殺す！ こうす！ ロロス！」

「あらら。負の意識が強すぎて魔石に飲まれたか」

青年は歯が尖り、悪魔のような山部の前で拳を振りかざし、素早く振り下ろした。

だが、彼の拳は山部の手に吸い込まれるようにおさまり、今度は山部が拳を構えた。

「や」青年は言葉を全て発する前に顔に拳を受け、窓を突き破り、外に飛んでいった。そして木にぶつかり、地面に落ちた。

「アルス！」姫坂は窓の外を見た。

「よそ見するな」窓に手をかけている姫坂の後ろで山部が黒く輝く爪を振りかざした。

ガシュツという肉が裂ける音と共に窓辺は血に染まつた。山部の狂気に満ちた叫び声が夜の町に響いた。

窓辺は血に染まり、姫坂は血に染まつた。

しかし倒れたのは山部の方であつた。山部の頭を窓の外から伸びた影の刃が貫通していいる。

攻撃をしたのはもちろん青年だつた。青年は木の枝に止まり、手から影の刃を伸ばしていた。

「が・・・がああああつ！！山部の悲鳴ともいえる悍ましい雄叫びが響いた。学校の周りの家の窓が次々と開き、野次馬が学校を覗く。」

「マズい！ 誰かに見られたら通報レベルだ！」

姫坂は慌て、青年に早く教室に隠れるように指示した。しかし青年は戻らず、姫坂に手を振つた。

姫坂は青年の手を見ると共なつて、意識が遠退くのがわかつた。ダメージを受けたわけでもなかつたが、不思議と眠りの世界に誘われていく。

「あ・・・・アルス・・・行く・・・な・・・」姫坂は遠退く意識の中で必死に呼び掛けた。だが姫坂は睡魔に負け、目を閉じた。

*

「ね・・・・・。ゆきねーっ！」姫坂が声に反応し、ゆっくりと目を開けると、目の前にはどこかで見たことのあるクマの人形。

「あ、気がついた。あんたなんで一日生徒会室で過ごしてんの？ 無断欠席になつちやつたよ」

姫坂を起こしたのは生徒会の会計、郷浦だつた？ 周りは何も変化のない生徒会室。

「さきちゃんか・・・。そうか…夢か・・・」姫坂は頭を起こした。少し頭痛がする。

「アルス？ 誰？ 夢の中で誰か会つたの？」

11

「昔の友人だ。死んだがな」姫坂は自分の服を見た。服は血ではなく、昼食の時にこぼしたスペゲティーのソースがついている。

「音楽室・・・音楽室で何か異変は?」姫坂は少しの希望をかけて、

郷浦に聞いた。

「何にも無いよ」郷浦はにこやかに笑った。

「・・・やっぱり夢か」分かつてている結果であつたが姫坂はショックだつた。

「帰る。ちょっと用事がある」姫坂は鞄を持ち、歩きだした。ギシギシと床が軋み、少し沈む。

「あーーい。会長にいつとくね」郷浦は手を振つた。

姫坂は郷浦の行動に、またわけのわからない睡魔に襲われるんじやないかと不安になつた。

姫坂の用事

それは普段はその男の命日にしか訪れない場所。

アルスの墓であつた。姫坂はアルスの墓参りに出かけたのであつた。

*

アルスの墓の前で姫坂は足を止めた。右手には花を持ち、左手にはキー・ホルダーを持っている。

「アルス・・・。夢だつたけど、少しでも話ができるよ。例え君が私の事を忘れても私は君を忘れないからな」姫坂は古くなつた花をえた。古いと言つても少し縁が残つてゐる。姫坂は少し前にノアが来たんだな、と推測した。

「これもやるよ。昔、君と初めて会つた時君のポケットに入つてたキー・ホルダーだ。多分大切なんだろ?」

姫坂がキー・ホルダーを墓の前に置こうとしたときには、姫坂の後ろで砂利を踏む音が聞こえた。

「どうしたの? 雪音さん」

突然名前を呼ばれ振り返ると、姫坂の後ろにいたのは、かつて戦つた仲間。

ノアだった。

「奇遇ですね。僕も花を添えに来たんですよ」ノアの手には新しい花が握られている。

「でも雪音さんが添えてるならいいかな・・・。僕はその古くなつた花を持つて帰りますよ。枯れていますけど綺麗な花だつたんでしょうね」

「ああ」姫坂は答えた。

「綺麗な花だつたよ。こいつの墓には似合わないほどに姫坂がノアに背を向け、花を手向けてた時、ノアは拳銃を姫坂に向けていた。

「甘いな！」姫坂は呟くと同時に花を投げた。花弁が散り、ノアは後ろへ後退した。

「ノアじゃないことは分かつている。この枯れた花、ノアが添えたものだ。君の発言とは食い違いがある」姫坂はポケットから粉と液体が入つた力プセルを取り出し、ひねつた。

力プセルは細長いサーべルに変わつた。昼間の墓場に沈黙が走る。

「こりやあ思つてもみなかつたところでミスしちゃいました。そうです、私はノアではありません」ノアは黒い煙と共に赤い髪に白いスーツの男に変わつた。

「私は魔族つて言えばわかるかな？君のよく知つてゐるその墓の中で眠つてるウェルギウス。もといアルスと同じ種族。その中の大魔王側近部第3番隊の隊長のマルバーです。以後お見知りおきを」マルバーは頭を下げた。

「礼儀正しい悪魔だ。だがそのキザな態度が気に入らないな」姫坂はレイピアをマルバーに向けた。

「礼儀正しいのが私のポリシーですから」マルバーは微笑を浮かべた。しかし姫坂はその微笑に、とてつもない邪氣を感じた。

「何の用だ」姫坂は警戒心を強め、いつ相手が攻撃してきても反撃

できるように構えた。マルバーはそんなに怖がらなくても大丈夫ですよ、とまたもや微笑を浮かべる。

「最近悪魔が人間を助けてるって言う噂を聞きましてね。もしかしたらテア・アルスが生きてるんじゃないかって思いまして来てみましたが、先ほどの対応を見て分かりました。その可能性は無いみたいですね」

「私も今確認した所だ。残念だつたな」姫坂は周りに人が居ないか確認し、安心した。

もし戦闘なんかになり、周りの人間を傷つけてしまえば、色々と面倒だからだ。

「まあ、今日の所は確認だけですので。それでは」マルバーは拳銃を下ろし、姫坂に背を向けた。姫坂はマルバーが自分に背を向け、立ち去るまでじっとマルバーを睨んでいた。

完全にマルバーの姿が見えなくなると、姫坂はレイピアを元の粉と液体に戻し、地面に捨てた。

そしてもう一度墓に視線を戻した。

が

「悪魔の言つ言葉に惑わされちゃダメですよ」

「えつ！？」姫坂はマルバーの声に、急いで振り返った。

振り返った姫坂の前にあつたのは銃口だった。

ドオン

銃声が響き、アルスの墓石に血が飛び散る。姫坂は銃弾を浴び、吐血し、墓にもたれながらゆっくりと倒れた。

姫坂が倒れると同時にマルバーは銃を指で回転させて、そのまま血にまみれたスースのポケットにしまい込んだ。

「さすがに手ぶらじや帰れないでしちう」

マルバーは口元を緩めて、墓にもたれて首を垂らしている姫坂を見つめていた。

墓場に風が吹き、木々がざわざわざわめいた。

第4 stage 天使と悪魔と人

「これで、大魔王様がお考えの戦争で、かなりの障害になる人間が消せた・・・。大魔王様も喜んでくれますかね？」マルバーは微笑を浮かべ、姫坂に背を向けた。

そして手で闇を作り出し、その闇に消えていった。

数分してから墓参りに来た人間達が姫坂を見て、顔色を変えた。

「誰かーっ！ 救急車を呼べーっ！！」

*

「そんな。雪音さんが・・・！」息を荒くしながら報告を受けた少年、ノアが病室に転がり込んだ。

ノアの前には多くのチューブや機械を身につけ、目を閉じて、ベッドに横たわる姫坂の姿だった。

「雪音さん！ 雪音さんは大丈夫なんですかー？」

ノアは姫坂に駆け寄り、医者に声をかけた。

「現在、一命は取り留めましたが、かなり危険な状態です。最悪の結果もあると思っていてください・・・」

医者は下唇を噛みながら言つた。そして続けた。

「やはりこれほど有名な彼女ですし、嫉みから狙われたか、Sの残党が襲つた可能性も・・・」

「クソッ！」ノアは病室の壁を叩いた。

「こんな時にアルスさんが居れば・・・」ノアは俯いた。

「クシユ」病院から遠く離れた廃ビルで一人の青年がくしゃみをした。

「風邪か・・・」青年は鼻を啜り、息を漏らした。

（あーあ、ようやく1年頑張つて戻ってきたのに風邪かよ・・・）青年はそんなことを考えながら廃ビルの階段を一段一段上がる。

青年は後一段で階段が終わる所で足を止めた。そして顎に手を当てた。

「病院行くか」青年は階段を一段飛ばした。

ビルの屋上は地上からは200mあり、ときおり突風が吹き付ける。しかし青年は突風にも怯むことなく、避雷針に飛び乗った。

「あれ？ 風邪つて何科だ」避雷針の上に立つ青年の服は突風によつて、大きくなびく。青年はしばらく街を眺め、ため息をついた。

「あの病院か？あの部屋には誰かがいた……が、どういうことだあれは？あの女の子死にかけじゃないか。なんか隣で子供が泣いてるし」

「まあ、行つてみるだけ行つてみるか。風邪なら移したくないし」

青年は頭をだるそうに搔きむしり、避雷針から足を離した。

青年の体がゆっくりと地面に吸い寄せられる。

青年は地面から50m程の地点で壁を蹴り、地面に足を付けた。周りの人間が驚いて目を白黒させているが、青年は気にはしない。周りの異様な目線の中で、青年は病院に向かつて歩きだした。

*

青年が病院の扉を開けると、そこにはノアは居なかつた。機械が外され、眠つている雪音の姿。

「オイ。傷、治してやるから起きろ」青年は眠りに就いている姫坂の顔をペチペチ叩いた。医者も誰も居ないので止める人間は居ない。青年が姫坂の頭に手を置き、息を吐くと、姫坂のまぶたが微かに動いた。

「あう・・・あ・・・・る・・・・す・・・・？」

「あー、先日のお墓…学校のお方、私、アルスでいいですよ。アルスだよ。アルスだから起きてください！」青年は自らをアルスと認め、姫坂に声かけた。

「アルスっ！」姫坂はアルスに抱き着いた。アルスは邪魔くさそう

な顔をしながら姫坂を抱きしめた。

「よかつた！夢じゃなかつたんだな！」

「あ、ああ昨日ですか。昨日は周りのヤジウマを寝かせよつとしたら君まで寝かせてしました。すみません」

「そんなことはいいんだ！本当によかつた・・・」姫坂は涙まで流した。アルスは若干戸惑いを隠せず、姫坂から顔をそらした。

「あ、すまない。思わず抱きしめてしまつた」姫坂は顔を赤めて腕を離した。その後、コホンと咳込んだ。

「で、どうやって生き返つたのだ？」姫坂はベッドから足を投げ出し、ベッドに腰掛ける形で落ち着いた。

「あー？さつぱり覚えてないです」

「ふむ。記憶喪失か」姫坂の記憶喪失か、と言う声と重なつて医者が病室に入つてきた。医者は元気になつた姫坂を見て、血色を変えた。

「オイ貴様！何してん！なんでその女が生きているんだ！機械を外したからもう死ぬはずだつたんだぞ。！」

「死ぬはずだつたんだぞ？ なんだ、殺そうとしたんですか？」アルスが医者を睨む。病室に異様な空気が流れた。

「てめえ、まさか2年前、外崎さんを追い詰めたアルスか？ 生きていたとは・・・」

「外崎？まさかお前もUの・・・？」姫坂はベッドから降り、構えた。しかし姫坂の言葉には医者は答えず。部屋から飛び出した。「なんかやばい感じがする！アルスついて来い！」姫坂は先導をきつた。アルスも素直にその後を追つた。

医者の後を追いかけ、たどりついたのは病院の地下にある鋼鉄の扉だつた。扉には医者が中から鍵をかけたらしく、開かない。

「強行突破だ。アルス、破れ」

姫坂の指示にお安いごようです、とアルスは答えた。

アルスは足を踏ん張り、力を込めた拳で扉を殴つた。扉は発泡スチロールのように砕け、部屋の中が明らかになる。

部屋の中には地下へ繋がる階段が、あり、先は闇に包まれている。

「この先か・・・」姫坂は小さく呟き、階段を下りはじめた。アルスは小さく舌打ちをして、姫坂の後に続いた。

階段が終わると、次に現れたのは長い廊下。先は相変わらず闇に包まれている。

時折、雑談を交わしながら二人は廊下を進んだ。

廊下が終わると、先にあつたのはどこかで見たことのある風景。Sの社長室。つまりアクラハイルとアルス達が初めて対面した場所である。

二人が部屋に足を踏み入れると、聞いたことのある声が二人の耳に入つた。

「ようこそ。アルス、雪音。 私だ、外崎だ」

外崎は椅子から腰を上げ、一人に歩み寄つた。姫坂は拳を構えるが、アルスは手をポケットに入れ、黙つて部屋を見渡している。

「外崎。お前、随分と優しくなつたじゃないか。2年前に私たちの前に居た血走り外崎とは違うな」

姫坂の言葉に、外崎はクスリと笑つた。

「そりやあ今でもあなたたちを許していませんし、今からでも殺してやりたいですよ」

「ですが」外崎は首を振つた。

殺してやりたい、という言葉に、警戒心剥き出しになつていた姫坂はですが、という打ち消しに手を下げた。

「今はどうしてもあなたの力が必要なんですよ。死体でも生身の体でも良いんです」

「どういうことだ」姫坂は武器へそは下ろしたが、警戒心は消さずに睨み続ける。

姫坂は水槽の魚に見とれているアルスを軽く突いた。

「今、この世界に大きな嵐が迫つてている。その嵐は世界を大きな危機に晒すと新約神書に書いてあるんですよ」

「神書？ 聖書じゃないのか？」

「神書はアクラハイル様が悪魔から手に入れた代物で、この世界にはないそうです。私達はこの神書の最後のページが気になつたんですよ」

「最後のページ？」

「最後のページにはこう書いてあります。“天ヨリ降リタル一ツノ者、地上ニ巣クウ者ト、交ワリ、風ヲ起コス。風ハヤガテ、全テヲ飲ミ込ム”」

「天より降りたる二つの者？」

「おそらく天使、そして悪魔でしょう。要約すると、天使と悪魔がこの世界に降り立つと、人間との争いが起き、その争いは全てを飲み込む」

外崎の“争い”と言う言葉に姫坂は聞き覚えがあつた。銃で撃たれ、意識をなくしながら聞いた言葉。マルバーが言った言葉。

「これで、大魔王様がお考えの戦争で、かなりの障害になる人間が消せた・・・。大魔王様も喜んでくれますかね？」

外崎は両手を広げて「その争い。誰よりも役に立つのはあなたなんですよ。雪音」

「私が・・・か」

「勿論です。私たちを滅ぼし、世界の英雄になつたあなたが、誰よりも役に立ち、期待される」

「そして」外崎は続けた。

「問題はアルス。あなたです」外崎はアルスを指差した。アルスは大きく欠伸をし、目に涙を浮かべた。

「あなたはどちら側なのですか。悪魔側なのか、人間側なのか」

「私ですか？どうでしょう」アルスはさらりと答えた。

「さあな、つてお前・・・」

「俺は自分が何かすら知らないのです。まあ悪魔だと思うんですけどね」アルスは手の平に黒い焰を浮かべた。黒い焰は不気味にゆらゆら揺れる。

「なら、彼はここで始末したほうがいいでしょう」外崎はポケット

から拳銃を取り出し、アルスに向けた。

「おい！なんのつもりだ外崎！」姫坂は叫んだ。

「なんのつもり？ いざれ敵となり厄介になる敵を始末するだけだ」外崎はそう言って、引き金を引いた。銃弾はアルスの頬をかすめ、壁に当たった。

「・・・姫坂。俺をはめたのですか」アルスがつぶやいた。

「違う！私は」姫坂が弁解しようとアルスに顔を向けた。その姫坂の顔にアルスの拳が降りかかる。

姫坂はアルスの拳をかわし、武器 リバイスをとつた。悲しみを浮かべながら。

「いいぜ。殺せるもんならやつてみてください。そのかわり、俺も抵抗はします」そう言つたアルスの眼は紅くなり、アルスの足元を黒い焰が包む。

「嫌だ！私はアルスと闘いたくない！殺したくない」姫坂は涙まで流した。しかし外崎は攻撃を止めず、アルスも拳に力を入れる。

「さあ、全力で殺してあげますよ。姫坂もクソみたいな男も」アルスはそう言つて、地面を強く踏んだ。その2秒後に外崎の足元から黒い焰が伸び、外崎の体を包んだ。

「死炎」アルスが拳を握りしめると同時に外崎は黒い焰に飲み込まれた。もがく外崎にアルスは手の平を向ける。

「止める！アルス！」姫坂が叫んだ。アルスは姫坂を睨む。

「うるさいですね」アルスは姫坂に体を向けた。姫坂はアルスに恐怖を感じ、怯んだ。

ゆっくりと歩み寄るアルスに、姫坂はリバイスによつて作り出した槍を向けた。

「さて何分持つでしょうね？」アルスが微笑を浮かべた。

第5 stage 一人の青年

「あの男はもう終わりです。次は貴方です」アルスは眼を紅く輝かせ、姫坂に近寄る。姫坂は体を小刻みに震わせながらバイスで作り上げた刀を持ち、構えた。

「嫌だ！私は君とは闘いたくない！」

「嫌でも闘うことになるんですよ」アルスは手の平で漆黒の弾を作り上げ、握りしめた。

ボウツ、という音を立て、拳から黒煙が立ち上った。

「さあ。人間様の力を見せてみてください！英雄なんだから少しはやれますよねエ！」アルスは大きく振りかぶり、姫坂に一気に詰め寄つた。

そして振りかぶりた手を振り下ろし、姫坂の顔に向かた。

姫坂は瞬時に後ろに下がつた。アルスは舌打ちをし、さらに詰め寄る。

「そうか、殺さなきゃいいんだ！」姫坂は叫んだ。

「その前に貴方が死にますよ。私に殺されて……」アルスは地面をおもいつきり踏んだ。姫坂は外崎がやられた攻撃と同じと推測し、アルスに詰めより、刀を振るう。

刀はアルスの右肩を切り裂いた。赤黒い血が舞う。

しかしアルスは不気味に笑い、姫坂の腹に手をつけた。

鈍い音が部屋に響き渡り、姫坂は後ろに吹き飛ばされた。激痛が姫坂の腹部に走る。姫坂は腹を押さえながらふらふらと立ち上がり、アルスを睨んだ。

「よく立てますね。今の攻撃で肋骨を折ったと思うんですけども」アルスは半分呆れるようにいった。

「こんなのは何回か体験してる。私はもう慣れた」姫坂は口から垂れる血を指で拭つた。そして少し口元を緩め、ポケットからラムネ菓子を取り出した。

「何をしてるのですか？今はおやつタイムじゃないですよ」アルスは落ちた刀を拾い上げ、姫坂に歩み寄った。

「おやつタイムじゃない。反撃タイムだ」姫坂はそう言つてラムネ菓子をかみ碎いた。ガリツという音がした途端に、姫坂の髪は紅く染まり、瞳が紅く輝いた。

「かつ、覚悟してくださいっ！」姫坂は自分の中の3つの人格の一つの陽菜に変わった。アルスは急な変化に後ろに下がつた。

「なんですか？ なんのマジックですか？」アルスは眉間にシワを寄せ、陽菜を睨んだ。

陽菜は地面を蹴り、アルスに詰め寄つた。陽菜の動きの速さに戸惑い、防御を忘れたアルスの腹を陽菜の拳が突いた。

アルスは吐血し、壁にたたき付けられた。だが陽菜の攻撃は止まない。

陽菜の拳はアルスの腹や顔に当たる。アルスが反撃する隙も与えないほどの猛攻が続いた。

陽菜の息が切れ、攻撃が止んだと共に、アルスの体は重力の法則にしたがつて床に倒れ込んだ。

「やつた・・・」陽菜は歓喜の声を口にし、拳を下ろした。

「なかなかいい攻撃でしたね」油断した陽菜の足をアルスが掴んだ。アルスはそのまま陽菜を上に投げ、大きくジャンプした。

「並大抵の攻撃では、私は倒せません。しかし小娘にしては上出来でしようか」アルスはそう言つて足を振り上げた。

「じゃあおやすみなさい。人間の英雄、姫坂さん」アルスの振り下ろした足は陽菜の腹を蹴り飛ばし、陽菜は地面にたたき付けられた。吐血し、床に倒れている陽菜の腹にアルスが膝から落ちた。

「ぐ・・・あ」声をもらし、苦しむ陽菜を中心には床は陥没した。薄れる意識の中、陽菜はアルスの足をポケットから出した銃で打ち抜いた。

「はつきり言いいます、無駄。諦めて楽になりなさい」アルスは陽菜の首を掴み、握る。

「アルス……お願い。思い出して……」陽菜は涙を流しながら蚊の鳴くような声で言つた。首を締め付ける激痛と苦しさは次第に強くなる。

「アルスっ……お願い……戻つ……て」そう言つたきり、陽菜の体は止まつた。

「さ、邪魔者も消したことですし、私は帰りますか」アルスは微笑み、姫坂を離した。

「帰る? どこに?」アルスの後ろから声が聞こえた。その声はアルスの耳に入るはずのない声。

「なんで俺がもう一人いるんだ? ってかそこに倒れてるの雪音か?」入ってきた男はアルスと全く同じの容姿の青年。姿形も声もすべてがアルスと同じであつた。

「参りましたね。本物とは」アルスの額を一筋の汗が流れた。入ってきた青年は何かを思つたような動作を見せ、ため息をついた。

「お前……? 悪魔族の中でも第1級の上級悪魔だろ。たしか相手に化ける能力がある……だつたつけな?」入ってきた青年は突然その場から消え、アルスの前に現れた。

「……さすが……ですね」アルスは青年をにらんだ。そしてアルスの周りを煙が覆い始めアルスは赤い髪の男、マルバーへと変わつた。

マルバーの姿を見て、青年は何かを思い出し、マルバーの肩をつかんだ。

「お前、王宮の兵士にいたマルバーか。懐かしいな」青年はにこやかにマルバーに笑いかけた。マルバーは多少警戒しながらも、青年の行動に心を緩めた。

「だけどな」マルバーの肩をつかむ力が強くなつた。「俺の大切な人傷つけるのは感心しねーな」

肩を掴まれ、身動きの取れなくなつたマルバーの腹にアルスの拳が入り、マルバーは声をもらしながら床に膝をついた。

「あともう一つ」青年が口元を緩めると、青年を中心として室内に

風が吹く。

「アルスは俺一人だ」

青年の目が紅く輝き、青年の周りを風が取り巻いた。

第6 stage　主人公（弱者）vs上級悪魔（強者）

「アルスは俺一人だ！」アルスは大声を出した。マルバーは口から垂れる血を手で拭い、立ち上がった。

「流石……ですね……。意識が飛びかけましたよ……」

「今度は飛ばしてやるよ」アルスは拳を構えた。拳の回りを黒い風が取り巻く。

マルバーは舌打ちした。アルスの力が予想を上回っていたため、焦っているのだ。

アルスの足が地面から離れた瞬間に、アルスの拳はマルバーの腹部を突いた。マルバーは堪え、アルスの顔に手の平を当てた。大きな音と共に、アルスの体は後ろに大きく吹き飛ばされた。

「影太刀」マルバーは地面に手をついた。マルバーの触れた部分は黒く淀み、マルバーはその淀みから黒い刀剣を抜き取った。

「どうですかアルス！貴方には扱えない第1級悪魔法ですよ！」マルバーは刀剣をアルスに向けた。黒い刃がゆらりと揺れる。

「確かに、俺じゃできない技だな」アルスは後ろで手を付き、反動で飛び起きた。

「だけどそれが俺を倒せる根拠には繋がらねエ！」アルスは口元を緩めた。

「まるで何処かの漫画の主人公のような事を言いますね」マルバーも微笑を浮かべる。

「主人公だからな」アルスがそう言い放つた瞬間、マルバーは一気にアルスに詰め寄り、刀剣を振るつた。アルスは刃をひらりとかわし、拳を振る。マルバーもアルスのパンチを軽くかわした。

マルバーはアルスより10歩下がり、剣を大きく振つた。振つたところから黒色のかまいたちが飛び。

「おお！ すげえ！ 出来れば俺もやってみたいぜその技！」アルスはかまいたちをジャンプしてかわした。かまいたちは壁に大きな亀裂

を入れ、消えた。その威力を空中で楽しそうに見ているアルスの前にマルバーは飛び上がった。

「よそ見とはずいぶん余裕ですね」マルバーは刀剣を振るつた。アルスは身体をねじらせ、刃を足で弾き、地面に着地した。

「あんた・・・上級悪魔のくせに弱いなあ・・・」アルスが鼻で笑つた。マルバーはコメントしない。

「それとも俺が強いのか・・・」アルスは笑つた。調子に乗つているのだ。

「もう止めですねこの勝負」マルバーは刀剣を手放した。刀剣は地面にふれ、黒い煙に変わつた。

「それはお前に勝ち目がないから・・・か?」アルスの周りから風が消え、アルスの瞳の色は黒に戻つた。

「いいえちがいます。貴方が今、どのくらいの力量が分かつたからです。これ以上の調査は必要ない・・・」そう判断しましたので

「調査・・・?」アルスは問い合わせ返す。

「もしアルスが生きていればどのくらいの力であるか調べてこいと大魔王様の命令を預かっていたのです。実際貴方は生きていて、その力量も分かりました。貴方の力は十分“終末”に使えますね」「終末・・・?何のことだ」アルスはさらに問い合わせ返す。しかしマルバーは答えず、自分の発言のみを続ける。

「アルス・・・魔界に戻りましょう。これから起る終末の為に、貴方をさらに優秀な悪魔に育て上げてあげますよ」マルバーは不気味にほほ笑んだ。

「やだね」アルスは即答した。考えることなく、マルバーが言い終わつたと同時である。

「俺はもう2度とあのクソみたいな世界には戻らない。今この世界が一番居心地がいい」アルスは姫坂をちらりと見た。

「残念だが魔界に帰れ。俺は帰るつもりなんて毛頭ない」アルスはマルバーに掌を向けた。アルスの家の平から黒い爆風が吹き、マルバーを包みこんだ。

「分かりました・・・。今日は一時撤退しましょう」マルバーは爆風の中、何事もなかつたの様に立つてゐる。アルスに背を向けたマルバーの目の前に黒い渦が出来、マルバーはその渦に飛び込んだ。そして飛び込みざまにアルスに告げた。

「また来ますよ」その言葉と共に、渦は姿を消し、何もなくなつた。大きな部屋に静けさが戻つた。

「とりあえず・・・この二人連れてかなきやな。幸い病院が近いんだ。おい！そこの医者！そんなところに隠れてないでこつち来い！そうだ！お前だお前！お前外崎連れてけ」アルスは姫坂を抱えた。姫坂は傷だらけで眠つてゐる。

「悪いな・・・遅くなつて」アルスが姫坂に笑いかけた。姫坂の眼が薄く開いた。

「まつたくだ・・・。1年も待つたぞ・・・」姫坂の小さな声がアルスの耳に入つた。アルスは驚いたような表情を見せ、起きてたのか、と声をあげた。声が裏返る。

「ただいま」アルスが笑つた。

「おかえり」姫坂が笑つた。

*

姫坂は幸いにも重傷ではなく、1日で退院と告げられた。あれほど盛大に炎上した外崎も全く持つてやけどはなかつた。なぜかというと、二人ともアルスが少しだけ治したのだ。もちろんアルスはそのことを一切口にしない。

「雪音は今、どんな生活送つてるんだ?」アルスがベッドに腰掛ける姫坂に質問した。

「学校だよ。ちなみに君も通うのだよ。さつき手続きをした」姫坂は携帯を出し、さらりと言つた。アルスは豆鉄砲を食らつたような顔で姫坂を見つめた。

「めんどくさいなあ・・・」アルスがため息をついた。

「学校も楽しいところだぞ」姫坂は微笑を浮かべた。この2年間でずいぶん明るくなつたな、とアルスは思つた。

「あ、でも俺の住んでるところお前の学校から遠いぞ」

「君はノアが住んでる家に住んだらどうだ?」姫坂は携帯でボタンを押した。ゴール音が姫坂の耳元になり、それはやがて声へと変わつた。

“なんですか雪音さん”

「あーいや、アルスが帰つてきたからな、君の家にアルスを住ませようと考えたのだが」

“大歓迎ですよ!というかようやく帰つてきたんですね!よかつたあ・・・ぼ”

電話は姫坂によって切られた。アルスはひどい、と心の中で呟く。「今から行つて色々準備して来い。ノアも君に会いたがつてゐるぞ」

姫坂は優しくアルスにほほ笑んだ。

姫坂はそのあと、アルスにノアの家までの経路を伝え、アルスを追いだした。アルスは素直にノアの家まで向かつた。

ノアの家に着いたアルスはノアの歓迎を受けた。沢山の話をしながら食事を食べ、新たに通う学校の準備までも手伝つてもらつた。ノアはまるで兄に甘える弟のようだなとアルスは思つた。そして頭の中に自分の妹であるレミルが浮かんだ。

(あいつ・・・今何してゐるのかな・・・)アルスは心の中で呟いた。

*

その頃魔界では、マルバーが大魔王であるアルスの父に地上であつたすべての事を余すことなく伝えていた。

「そうか・・・ルシファーもといアルスは生きていたか・・・。これで私の大いなる作戦は実行できる・・・。終末を実行できる・・・。大魔王の不気味な笑いが王宮に響いた。

第7stage 入学

「今日はS.T.始める前に転校生を紹介するよーーー！」担任の桜庭結衣のこの言葉で、姫坂の所属する2ーAの一日が始まった。転校生ときき、騒ぎ出すクラス。もちろん姫坂は除いてだが。

「えーと、姫坂さんの・・・お兄さんの・・・」

「姫坂明です。漢字はこう・・・これで姫坂明です」アルスは黒板にチョークで名前を書いた。

青で。

姫坂は、なんでわざわざ見にくる青で書いてるんだ・・・と言ったかった。だが我慢した。

「席は窓際の、後ろから一つ目だよ。ちょうど伏見泉ちゃんの斜め右ね

「せんせーなんで斜め右なんですかー？」

「なんとなくです！」

教師のおかしな発言に対する男子生徒の冷静なツッコミ。日常茶飯事なのだろう。

アルスは指定された席に移動し、座った。座った瞬間アルスは後ろから声をかけられた。

「ねえねえ、明くん。姫と兄弟なんでしょう？姫ちゃんってどんな感じ？」

アルスは質問に「うーん」とうなつた。

「ああ見えて俺に対しては感情的なんだよ。これからも迷惑かけると思うから兄としてよろしく」

「兄としてよろしく頼むわ、っ」そう言おうとしたアルスの額にものすごい速さで飛んできた教科書がヒットし、アルスは机に突つ伏した。

姫坂は鋭い視線で「余計な事は言わなくていい

アルスは机に突つ伏しながら姫坂を指差して「ま・・・まあ・・・

俺に対してはあんな感じだ・・・・・

「なるほど・・・・・」

アルスに話しかけた女子生徒は一人のやりとりに若干、引いた。

「今日のお知らせは以上です。ＳＴを終えます！」

二人のやりとりの間にＳＴは終わり、1-Aは1時間目に入った。担任が教室を後にしてすぐ、別の教師が教室に現れた。

茶髪にカールがかかった女性の先生である。

「はい、じゃあ1時間目の数学2を始めるぜ。あれ?君、見ない顔だな」教師はアルスを指差していった。

「あ、俺は今日入ってきた姫坂明つす。姫坂雪音とは兄妹です」

「そうか転校生か。アタシは愛知麻里菜っていう教師だ。じゃあ明」愛知は手を前にだした。アルスは握手すると理解し、手を出した。

「じゃーんけーん」

「え、あ?は?」

「ほん」

愛知の突然の行動に、アルスは戸惑いつつも答えた。

「君の負け」

グーとチョキで、アルスは負けてしまった。しばらくクラスに沈黙が走り、アルスも唖然としていた中、愛知だけが満足そうに笑っていた。

「んじゃ、授業始めるぞ。明は席につけ。教科書開け、たしか・・・・58ページだな・・・・」 愛知は何事も無かつたように授業をはじめ出した。

（なんだこの教師・・・・・）

「おい、明。席に座れよ。授業始まってるぞ」

立ちすくむアルスを愛知が注意した。アルスは愛知を睨みながら席に着いた。

アルスは小声で「なんだあれ・・・・」と先程の女生徒にきいた。

「あれは先生の歓迎みたいなかんじ。別に嫌な意味は無いよ」

「歓迎ね・・・・面白い先生だな・・・・・」

「ね。でも、あれでも東大出身よ」

「東大？いいところなのか？」

「東大知らないの？東大って言つのは、日本トップクラスの大学、東都大学の略称。まあ、天才って思つてくれればいいよ」

「天才・・・ね」アルスは板書に向かつて数式を書いている愛知に視線を移した。

「あれが・・・」

アルスの頭にチョークが当たり、チョークが粉々に弾けた。

「明。うるさい、殺すぞつ。水玉萌も授業中に、話しかけるな」ヨダレを垂らしながら机に倒れているアルスとその後ろで苦笑いしている水玉が声をそろえて謝罪した。

*

午後4時、すべての授業が終わり、生徒たちは帰宅する者、部活動に行く者、教室に残つて話している者などに分かれた。水玉は大きな荷物を持って姫坂に別れを告げて教室を出て行つた。

「姫坂・・・おまえはどうするんだ？」

「学校では雪音と呼べ。私はこれから生徒会室に行つて生徒会活動という大事な仕事をするんだ。暇人の君は帰つて街のパトロールでもしておけ」

「あのなあ・・・俺はそりや悪魔とかそういうのとは戦うけど、一般的な犯罪には何もしてやらないぞ。正義の味方じゃないんだから」

「街に悪魔がいるかもしれないぞ？それでもパトロールはしないとでも？」

姫坂は黙りこんだアルスを見て、席を立ち、鞄を背負い、アルスに背を向けて教室の扉へと歩き出した。

「わかったよ！その代わり姫・・・雪音に何かあつてもこれなくなるかもな！」

姫坂は来なくていいよと言葉を残し、教室を後にした。教室に取り残されたアルスは鞄を手に取ると、教室を後にした。廊下では沢山の生徒が行き来している。

スリッパをパタパタ鳴らしながら廊下を歩くアルスは突然、近くに違和感を感じ、あたりを見渡した。

（今は・・・魔力・・・まさかな、さつきまで何も感じなかつたし、今は消えてる・・・）

視線を前に戻し、アルスは廊下を再び歩き始めた。

アルスが帰宅したとき、家には誰もいなかつた。ノアは近くの中学に通つているうえに、部活に入つてるので帰宅は遅い。

アルスは自分の部屋に移動し、ソファに倒れこんだ。

（やはり・・・さつきの学校で感じた魔力・・・気になるな。だけど何故魔族が人間界の学校に通つているんだ・・・？俺のような奴がいるのか・・・？）

アルスは色々と考えているうちに、いつの間にか目を閉じ、眠りについていた。

アルスは嫌な夢を見た。姫坂が自らの前で息絶える夢だ。姫坂が息絶えた時、アルスの目の前で真っ黒な何かが不気味に笑つた時、アルスは目覚めた。

「クソッ、嫌な夢みちまつた」

アルスは立ち上がつた。顔にはソファーのしわの跡がつき赤くなつてゐる。アルスは大きなあくびをして時計を見た。

「5時半・・・そろそろ日が落ちてくるころか」そう呟いてドアノブの手をかけたアルスの背中に突然悪寒が走つた。

「魔力・・・まさか・・・」

アルスはドアノブから手を離し、急いで窓から飛び降りた。家の屋根をけり、アルスは電柱のてっぺんに飛び上がつた。日が沈みかけ、街はオレンジ色に染まつてゐる。

「この方向つて学校・・・まさか・・・」アルスの頭に先ほどの夢の内容が駆け巡つた。アルスは舌打ちをして、急いで学校へと向か

つた。

学校にたどり着くと、アルスはまず校内の気配を探つた。先ほどの魔力は消えている。それどころか校舎にいるすべての人間から気配が消えている事に気がついた。自分の隣で話している女子生徒の気配すら感じられない。

「クソツ！なんなんだ。一体誰なんだ！」

アルスは校内を走り抜け、姫坂の居る生徒会室がある3階にたどり着いた。魔力も気配も何も感じられない事態に困惑しつつも、アルスは生徒会室まで走り、扉を力強く開けた。

「な・・・アルスじゃない明！？いつたい何しにここに？」アルスの視線の先では姫坂が生徒会書記の山本と久保とばば抜きをしてた。真中で会長らしき人物が携帯ゲームをやつている。

「よかつた無事なのか・・・」

「何、ゆきちゃん、彼氏！？」久保が、からかうように言つと、姫坂は顔を真っ赤にしながら「違う！」と叫んだ。

「け・・決して彼氏なんかじゃない！その・・あれだ！」混乱する姫坂を見て、生徒会にいた人間達は笑つていて。しかしアルスだけが険しい顔をしている。

アルスは姫坂の袖をひっぱり「雪音・・ちょっとこい。あ、すみません他の方々、僕は雪音の兄の姫坂明つています。どうぞよろしく」

生徒会室から出た姫坂は不機嫌そうに「なんだ」と訊いた。アルスは姫坂に、校内での異常を伝えようとしたが、突然口を閉じた。

「あ・・えつとな、ノア・・！ノア知らないか！？」

「ノア！？中学校だ！君はバカなのか！？そんなこと聞く為にここまで騒ぐなんて！」

「ああ、あははわりい、わりい。じゃ あな」

「まで！何しに来たんだ君は！」憤慨する姫坂を廊下に残し、アルスは2階に降りた。

（魔力が感じられることを言つと、姫坂は混乱する。この問題、俺

だけで解決しなくちゃな）

アルスは能力を全開にし、魔力を探つた。相変わらず何も感じられない。

だめか、と呴いて吐息をついたアルスに一人の男子生徒がゆっくりと近づいていた。

「やあ」

男子生徒はアルスに聞こえるように言った。

「ん？ なんだお前？」

「デア＝アルス・・・って君の事だよね」

夕陽が照る廊下に、どこからか風が吹き付け、お互に来ている制服がなびいた。

「なんで俺の名前しつてるのかな～？」

アルスの問いに、男子生徒は答えなかつた。その代わり、男子生徒は当たりだと呴き、不気味に笑つた。男子生徒の不気味な笑い声が廊下に響く。

「いきなり笑いだすなんて大丈夫か？ 周りの生徒が迷惑・・・」

「周りの生徒なんていないよ」

男子生徒の言葉に振り返つたアルスは、驚愕した。先ほどまでにぎわつていた廊下は誰ひとりいなくなり、アルスと男子生徒二人だけになつていていた。廊下の掲示板には、先ほどまで誰かがいたように、貼りかけのポスターが垂れている。

「なにやりやがつたんだお前！ 事と次第によつちやタダじや済まさないぞ」

「へえ・・見ず知らずの人間が消されても怒るんだ。さすが、情を持つ悪魔、だね」

アルスは男子生徒から流れ出す、不気味な気配を感じ取つたので「・・・てめえ・・・悪魔だな」と睨みつけた。

「そうだよ・・。君以外の悪魔なんて人間界に沢山いるんだよ、ここに居てもおかしくないでしょ？ あ、そうか病原菌みたいに隔離されてた君は知らないんだつけ・・・？」 悪魔はあざ笑うように言つ

た。アルスの眉間にしわがよつた。

「てめえ・・・」アルスの拳に力が入った。

悪魔はそれを見て「殴っちゃダメだよ・・・?殴つたらこの場に張つた結界をといて、君を暴力生徒として報告する。入学初日に暴力事件なんて起したら・・・。ね?」

悪魔は続ける。

「僕が伝えに来たのは一つ。ヒメザカコキネとかいうあの人間と関わることをやめる。このままいけば君は完全に崩壊する。身を滅ぼすことになるよ」

「余計な御世話だ。つーか人間と関わるなって言つてるお前もこの学校に在籍する限り、人間との交遊があるはずだぞ」

「無いよ。僕はこの男子生徒に憑いてるだけだからね、普段交流しているのは持ち主さ」悪魔は自分の胸に手を置いた。アルスはさらに拳に力を入れた。だが殴れない。殴ればこの男子生徒に傷が付き、自分も暴力生徒として問題になる。

「今から2日後、君の学年では野外合宿がある。そこであの人間を殺してね。そうすれば君は身を滅ぼさなくてすむ」

「なんか人魚姫みたいな流れだな。なら俺は泡になつて消えるかもしれないな」アルスは笑つた。悪魔はゆっくりと息を吐くと「忠告はしたよ・・・。じゃあね」といつて階段を下りて行つた。

「身を滅ぼす・・・か」再び活気の戻つた廊下で、アルスは呟いた。

2日後、悪魔が話した通りアルスと姫坂を含む2年達の野外合宿が始まった。2年達はそれぞれのクラスのバスに乗り、目的地へと向かっていた。

アルスは、というと楽しそうにレクリエーションをしているクラスの中で一人氣難しい顔をしている。隣では姫坂が別人格の花音を使い、得意の頭脳でレクリエーションのクイズを制していた。（姫坂と離れなければ、見を滅ぼす・・・か・・・。信じがたい話だけど、嘘だという確信もな・・・）

「いてつ」

一人悩むアルスの頭を花音が小突いた。アルスは顔をあげて花音を睨む。花音の顔は・・・笑っていた。

「何、難しい顔しとんねん。楽しまんかい！」

笑顔で声をかける姫坂・・・ではなく花音を見てアルスは難しいことを考えることをやめた。せっかくなら楽しもう、この状況を。

アルスは、よし、と気合いを入れて花音に笑顔で返した。

バスは車体を揺らしながら林道を進む。

・まもなく、目的地に到着致しますので、皆さん降りる準備をしてください！

若い女性のアナウンスでアルスは目を覚ました。変な眠り方をしたらしく、首に痛みを感じる。

「お早うアルス。君、どんな夢見てたんだ？寝言が気になつたんだが」

「寝言？」

「内容は小さくてあまり聞こえてないが、私の名前が聞こえた気が

した。私と離れるみたいな感じ」

アルスは夢を見たこと自体覚えていないので、何も言えなかつたが、姫坂が聞いたらしい寝言から自分は先日の事に關した夢を見たのだと判断し、適当に「ごまかした。しかし姫坂には上手く伝わらなかつたらしく、何度も聞き返す。

「着きました。みなさんご苦労様でした。

アナウンスに助けられた。アルスは適当に笑つてごまかし、逃げるようにはバスを降りた。

アルスの不可解な行動に姫坂は「怪しい……」と呟き、アルスを追つた。

バスを降りると、姫坂は目の前の光景にまず目を奪られた。

「久しぶりにみた……こんな景色……」

目の前には雲が敷き詰められて真っ白な地面の様な風景が広がつていた。

「雲より高い場所で野外合宿……いいな……いや、そんなこと気にしてる場合じゃない！アルスは……」

姫坂がきょろきょろ辺りを見渡し、アルスを探している場所から少し離れた木の上にアルスは止まり、魔力を探つていた。

（魔力の反応は無し……。あいつは魔力を消せるみたいだから意味があるかどうかはわからないな……）

「オイ！誰だそこ！危ねえから降りろ！」

下から怒声が聞こえた。下を覗くと、下では顔を赤くした教師が鬼の形相でアルスを睨んでいた。

アルスは黙つて木を離れた。たが叱られるのが嫌なので下には降りず、数10m先の木に飛び移つた。

教師は突然生徒が消えた事に、啞然とした。

アルスは誰も居ないのを確認し、木から飛び降りた。服に葉っぱが付いているのに気がつき手で払つ。

葉っぱを払うアルス周辺で風もないのに、突然草木がざわめいた。木のざわめきと同時にアルスは後ろに気配を感じ、振り返つた。

「こんにちは」

アルスに話かけてきたのは学生服を着た少女。すらりと伸びた黒髪は吸い込まれるような黒みを帯びており、作り物の様に見えるほどである。

「一人で何をしてるの？ 友達いないの？」

「べつにダチぐらい居るさ。お前こそ一人で何してるんだよ？」

「んー別に。特に意味は無いよ。ただふらりと来ただけさ」

「・・・本当にか？」

「本当に・・・」

疑い深く、自分を信用しない青年を少女は無表情で見つめる。アルスはそのままに吸い込まれるような感じがし、鳥肌が立つた。

「自己紹介でもするかい？」^{さだめ}これで会つたのは何かしらの運命だ。出会いは大切にしなきやね

「別にお前に・・・」

「“お前に名乗る名前はない”ってね。まるでビックセイの主人公みたいだね。まあ、君は主人公だからいいか」

少女は無表情で続ける。しかしその無表情の裏に、なにか恐ろしい怪物が隠れているようにアルスは感じた。辺りではその不気味さに震えるように草木がざわめく。

「主人公・・・ねえ・・・。嬉しいこと言つてくれんじやん。マンガとか読んでる俺にとつては主人公とか言わると感激するわ」

「そうだろうね。君はそう設定された存在なのだからね」

アルスは何故か次第に息苦しくなつていいくを感じた。この少女の一言一言が胸に突き刺さるようである。

「・・・何だよお前。主人公やら設定やら、何のことだよ。まずお前は誰なんだよ」

「私？私の名前はマー・・・いや・・・」

少女は何かを言いかけて口を閉じた。うーん、と唸り何かを考えている。

アルスはその姿にドキリとした。

「これは前、姫坂と出会った頃の自分と同じ……。そう思つたのだ。
「ま、好きに呼んでよ」

少女は初めて笑つた。しかしその笑顔は決して純粋ではなく、何か
悍ましいなにかが隠れているような笑顔。

「じゃあ君の名前は？人に答へさせて自分は答へないなんてのは行
儀悪いよ」

「…………姫坂明だ」

アルスは学校のほうの名前を使った。

すると少女はみるみる冷たい表情になり、低音で「嘘をつくな」
アルスはまたどきりとした。こいつに見透かされている……。
「デア」アルスだ。だがさつきのも学校の通り名で間違つちゃいな
い

「嘘だ。まだ名前があるだろ？」

少女はさらに低い声で問い合わせる。アルスの額に汗が一筋。

「…………」

アルスは黙つて後ろに下がりはじめた。この場から逃げなれば……。
……。この不気味な人物から一刻も早く……。

「逃げるな」

いままさに後ろに飛び去ろうとしたアルスの頭を少女が押さえて地
面にたたき付け、押さえた。

「行儀の悪い男だな。それでも主人公？」

少女はアルスの頭を押さえ付けながら言う。その押さえる力は、と
ても人間とは言えないほどである。

「ぐ……お前……この力……人間じゃ……ないな……悪魔か……
……？」

アルスは押さえる力に反発しながらいった。少女は少し笑い、手を
離した。

「流石にここまでやれば氣づくか。そつ……私は悪魔だよ。ちな
みに名前はカーラ・マーラ、階級は大魔王側近A……つまり「
最上級悪魔……。マルバーよりもさらに上……」少女の言葉

にアルスが合わせた。

すると少女はクスリと笑い「あはっ、正解！でもマルバーミたいなバ力に比べられたのはショックだなあ・・・」

吐息をつくマーラから逃げだそうとアルスは魔力を引き出しあじめた。次に逃げる時は全力で逃げるために。

「だーかーら」マーラが呟いたのはアルスが飛び立った時。

「逃げるなつていつてるよね」

物凄い速さで逃げるアルスにマーラはすぐ追いつき、アルスの顔をマーラの拳が殴りつけた。殴られたアルスは地面に落ちた。

「今日はちょっと私という人物の紹介にきただけだから。別に逃げる必要はないよ」

アルスの前に足をついたマーラはアルスの顔を覗き込んだ。

「クソッ！」アルスは飛び起き、マーラに殴り掛けた。

マーラはいともかんたんに拳を受け止め「オイオイ、君みたいな低級貧弱童貞悪魔が私に勝てるとは思ってるのかい？スライムがバラモスに戦いを挑むぐらい無駄だよ？」

「うるつせえ！！」

アルスはもう片方の拳で殴りつけた。

マーラはその拳も受け止め「熱いねえ、さすが主人公！でも主人公なら主人公らしく一回負けて、修行して敗者復活して私に挑んでね」アルスの腹をマーラの膝が突いた。アルスは小さく呻き、膝をついた。

「じゃあね。待ってるよ、君の・・・主人公の敗者復活劇」

少女は、アルスに背を向けて森に消えた。風が吹き抜け、アルスの制服がなびいた。

（何なんだあの野郎・・・俺が向こうに居たときは居なかつたはず・・・）

「なんなんだよ・・・」

一人呟いたアルスの耳に、またもや怒声が届いた。

「姫坂明アー！–どこにあるんだコラア！！」

アルスはため息をつき、痛む腹を摩りながら怒られに向かった。

*

アルスは、勝手な行動をしたということで1時間しぶられた。アルスが先生用の小さな家から出ると、目の前には今度は男子生徒。しかもその顔は見覚えがある。

「また会ったね。2日ぶりかな？」

「別に俺は会いたくなかったんだが」

露骨に嫌な顔をするアルスに男子生徒を装つた悪魔は「そういうなよ

「ところで君は姫坂を殺せるのかい？」

悪魔の言葉にアルスはきつぱりと「殺さない。俺は姫坂を・・・雪音を殺す気はまったくもってない」

アルスの答えに悪魔は首を数回振り、ため息をついた。

「いいの？それで

「構わない」

きつぱりと言つたアルスに悪魔は無表情で「なら・・・」

「僕が殺すよ。君の代わりに。」

「なっ・・・」

「だつて君が殺せないんなら誰かががやるしかないでしょ？それを僕がやつてあげるって言つてるんだ」

悪魔の拳から魔力が漏れはじめた。それに従いアルスもいつでも対応が出来るように身構える。

「ま、いつやるかは僕の気分次第だけどね」

悪魔はそれだけ言つて逃げるようになってしまった。拳から漏らした魔力は戦うためではなく逃げるためであつたのだ。

「姫坂が危ない・・・」

アルスは急いで姫坂の居る小屋に向かった。

「姫坂！」

ドアを蹴破るように2 Aの女子が居る小屋にアルスは入った。

「・・・・・」

アルスが入った途端、小屋の中は一瞬凍りついた。そして
きやあああああ！！

ガード下よりもうるさい悲鳴が響いた。中では女子達が着替えをして
いたのだ。

「アルスウウウ！」

戸惑うアルスの顔に姫坂の飛び蹴りがめりこんだ。アルスは「うう
つ！」と悲鳴をあげ吹っ飛んだ。

「お前！私達にラッキースケベ発動させるとはい一度胸だな！この
大馬鹿野郎が！」

アルスは鼻血を流しながら「ちがつ・・・・ちがうんだ！『これは・・

・』

「え？違う？鼻血なんか流して何が違うんだ！」

「いや、これ今喰らつた飛び蹴りのせ・・・」

「言い訳するなあーつ！！」

アルスは再び蹴りをくらい、小屋から投げ捨てられた。

「あークソツ！今日は厄日か？」

小屋の前で一人、鼻血を垂らしながら怒るアルスを数名の男子生徒
が指差して笑つた。アルスの鼻がつーんとした。目に涙が浮かんだ
が、こんなことで泣くわけにはいかない。

まもなく飯盒炊爨です。生徒の皆さん第2広場に集合してください。

涙を堪えていたアルスの耳にアナウンスが届いた。アルスは飯盒炊
爨が理解できなかつたが、涙を拭い、向かつた。

飯盒炊爨の説明を終えると生徒達はグループに分けられた。アルス
は第4班。班にはアルスを含めた男子生徒2人と女子生徒3人。
それぞれ先生の合図と共に飯盒炊爨を始めた。

「よつ、明・・・だつけ？」

野菜を調理場まで運ぶアルスに同じ班の男子生徒が話し掛けた。

「そうだけど・・・。なんか用か？」

「なんか用かつて・・・同じ班なのに酷いこと言うよ・・・。俺はひふみまこと。いちにいさんで一一三。まことは誠実の誠だ。同じ班なんだから覚えてくれよ・・・。」

アルスは小さく一一三に謝罪した。一一三は一カツという笑顔に変わり、アルスの背中をバシバシ叩いた。

「よろしくな、明！」

気さくに話し掛けてくる仲間にアルスはちょっと嬉しくなった。人間はやはり優しいと心の中で思った。

「うし、じゃあ飯作りにいこうぜ」

一一三の言葉にアルスは「おう！」と返事をし、再び歩きだした。そんな賑やかな山奥のキャンプ場。その数百メートル先で、制服を着た一人の男女が木の上でそのキャンプ場を見ていた。

「素戔鳴尊、どうかなルシフェルは？人間を殺せると思うかい？」

「僕は無理だと思うね。あそこまで人間に浸透してしまったら・・・」

「ね。しかも姫坂とか言う人間の女に特別な感情を抱いてるし」「・・・このままでこのエゼキエルに記してある世界創造の時の事件みたいになってしまわないかな？」

「仕方が無いけどルシフェルと、悪魔のこれからの方。大魔王様から授かつた計画を実行しようか・・・」

「・・・・・その顔、仕方が無いからって顔か？」

不気味に微笑んだ素戔鳴尊の隣で、マーラが大きく見開いた目と大きく開いた口で「あはは・・・」と笑った。

食事を終え、自由行動を満喫する生徒で入り混じるキャンプ場にアナウンスが響いた。

「21時から予定通りキャンプファイアを行います。生徒の皆さん、遅れないようにしてください。くり返し…」

放送を聞き、アルスが首をかしげる「キャンプファイア…なにそれ」

「冗談だろ？お前キャンプファイアは小学校とか中学校とかでやつただろ？」一一三はからかいながら言つた。アルスの話は全く持つて信じていない。

「ああ…えーと俺ぞ、言つて無かつたけど帰国子女なんだよね。今までアメリカに居たんだよ…」

アルスは即興のいいわけで対応した。最近言い訳を考えることが上手くなつていてる気がする…アルスは心の中でそう苦笑いした。

一一三はアルスの言葉に目を輝かせながら「え？マジ…？じゃあ英語とかしゃべれるの！？」

アルスは魔界で覚えた英語を適当に話した。それでも一一三は目を輝かせ、すごいすごいとはしゃいでいた。

「んでさ、結局キャンプファイアってなに？」

「キャンプファイア…っていうのはな…告白ムード全開の祭り…」

「キャンプファイア…、キャンプで焚き火を囲んで行われる行事のこと。火の神への崇拜が起源。あんた適当な事教えんじゃないわよ！」

！」

自慢げに説明している一一三の話を割つて一人の女子生徒が割り込んできた。一一三は一瞬驚いたがすぐに女生徒に怒り出した。

「なんだよ東西南北！別に間違っちゃいないだろうがつ！」

「あんたねーそうやつて変なことばっかり教えてるからモテないのよーこの彼女いな歴イコール歳！」

そんなの関係ないだろ、関係あるわよ、など一一三と東西南北の言い争いは止まらない。アルスはその横でただ一人を見ていた。

「なんだこのヤロー！喧嘩なら買つぞ！」「

「じょーとーじゃない！ボコボコにして学校に強制送還してあげる！」

言い争いをしていた二人はとうとう殴り合いを始めた。隣で見ていたアルスは止めるとはせず、ただため息をついてその場を離れる。キャンプ場に21時を告げるアナウンスが鳴った。生徒たちが次々と広場へ向かつて移動し始める中、一人の男子生徒と女子生徒が木の上で生徒達を見下ろしていた。

*

「いつて…あのアホ…力の加減ちゅーものを知らねえのか…？」アルスの隣で一一三は赤くなつたほほをさすつていた。顔の至る個所を赤くしている一一三を見て、アルスは手を向けた。

「ん？ 何？」

動作に反応し、一一三はアルスを見た。アルスはあわててその手を引っ込める。

（治してやるうと思つたけど…。さすがにまずいか）はたからみるとわけのわからないとしか思えない行動に、一一三は「変な奴」と笑つた。

「いやーこのキャンプでさ、転校生と同じ班に…」

一人で話し始めた一一三をよそに、アルスはあることに気が付き、ハツとした。

「雪音…！ そういうやむつきから…」

姫坂の事を思い出したアルスだが、昼間の惨劇を思い出し、首を横に振つた。

「……いいや」

「な…なに？ 突然どうした？」

現状を理解できない――三が訊いたが、アルスはなんでもない、と答えた。何か気になるようで――三何度か質問して来たが、アルスはすべて同じように答えた。

なんだよ、と若干ふてくされた――三の言葉と共に、広場の電気は消え、あたりは闇に包まれた。電気が消えた瞬間、生徒たちがざわめき始める。

「みなさん…とうとうこの時間がやつて参りました…！」

暗闇の中、誰かの声がアルスの耳に入った。

「第2学年！野外合宿お楽しみキャンプファイヤーの始まりです！
ワフー――――――――ツ…！」

歓声と共にいきなり中央にあつた組み木が炎をあげて燃え始めた。その燃える組み木の前でピエロのような衣装をまとつた男性生徒がマイクを持っている。

「それでイわ！まずはこの私、ピエロが一曲…」

そう言つて踊り出したピエロにヤジが飛んだ。ピエロは一瞬落ち込んだが、すぐに立て直しました仕切り始める。

「ではまず最初！B組の一部の人による♪…」

ピエロが手を振り上げた時だつた。大きな爆発音と共に、キャンプファイア―が大爆発を起こし、ピエロは爆発に巻き込まれた。飛びとつた木の破片はその炎を絶やさぬまま飛び散り、生徒を襲う。キャンプ場は一瞬にして歓声から悲鳴に変わつた。

ピエロは服が燃え、地面に倒れている。そのピエロの火を数人の生徒と先生が必死で消している。それを口を開けながら見ているアルスに――三が呼びかける。

「おい明！お前も逃げるんだよ！オイ！」

「あ…ああ…」一応、返事はするアルスだが、周りをきょろきょろ見渡し、何かを探してゐる。

（雪音…あいつはどこに…）

その時だつた。

アルスの後ろ。丁度――三が逃げた方向に何か大きな音が響き、鈍

い音と共に悲鳴が上がった。すぐに一二三を含む生徒たちがアルスを追い越して逃げて行く。

「一二三！何があった！！」

アルスは一二三に訊いた。一二三は血の氣を失った顔で何かを伝えているが、あまりの恐怖にうつが回つておらず、何を言っているか分からぬ。

一人困惑するアルス。その頭には姫坂の姿があつた。姫坂がいれば何となる、あの冷静な姫坂さえいれば…。

そのアルスの後ろに一人の女子生徒が降り立つた。アルスはそのままじい氣配に振り返る。振り返つて目の前に居たのは 燃えあがるキンシップファイアの前に黒いセーラー服を身にまとつた黒い髪の少女。

「マーラ… てめえか…」

声を震わせながら問うアルスを見てマーラはふつ、と吹きだした。

「あはは！怒つてる怒つてる！ そうだよ、この事件は私、カーマ・

マーラと、素戔鳴尊が仕組んだ事だよ」

アルスは拳に力を込めた。はちきれんばかりの怒りで今にも飛びかかりそうである。

「まあそう怒らないで。私達も皆殺しまではしないからね。私達と一緒に魔界に来てくれる、それだけ言つて貰えれば止めるから。それと…」

マーラはアルスの後ろを指差した。アルスの後ろからいつの間にか悲鳴が消え、その代わりに何か大きなものが、ずしん、ずしんと近づいてきてる。一二三が恐怖におびえてアルスの袖を必死でつかむ。「素戔鳴尊、あいつは手加減しないからさ。早めに言わないとお友達みんな死んじゃうよお？ そのびびつてる子もね」

マーラが言い終えた瞬間、アルスの頭上を大きな何かが通り過ぎた。

「やあルシフェル。お昼ぶりだね」

頭上を通り過ぎ、地面に降り立つたのは大きな牛のような怪物に乗つた、素戔鳴尊と呼ばれるあの悪魔の憑いた男子生徒。その姿を見

た一二三は驚きのあまり失神し、地面に倒れた。

「あ、これねエ…アーマーンつていう僕の可愛いペット。すげく凶

暴で好物は肉だよ。特に人間の肉とかが好きなんだよ」

そういうて素戔鳴尊はアーマーンをなでた。アーマーンの口には多量の血とよだれがべつとり付いている。

「クズ野郎どもが…！何してんだよ…！」

「オイオイ…上司に向かってクズ野郎つて失礼な人だなあ…。君は王の実の息子でもないのだから君には王族の特権なんて…」

「マーラ、その話、タブーでしょ？」

「あ、そうだつたっけ？」

わざとらしく首をかしげるマーラ、その横で首を振る素戔鳴尊。その一人のやり取りを聞き、アルスは肩を震わせた。

「どういふことだよ…俺が大魔王（おほわらわ）の実の息子じやないつて…」

訊くアルスに、マーラは首を振る。

「別に言つてもいいんだけど素戔鳴尊がダメだつて。魔界に来てくれたから教えてあげてもいいつて」

素戔鳴尊はため息をつきながら「そんなこと言つてないよ」

「とにかく…私達と一緒に魔界に来てつて話だね。そうすればこれ以上犠牲者出さなくてもいいし、君も真実を知れる。私達も大魔王様に褒めてもらえる。デメリットは…」

「デメリットならここにあるぞ…！」

淡々と話すマーラの話に、アルスには聞きなれた声が割つて入つた。綺麗な黒髪を左右で結び、ツインテールにした一人の少女。

「雪音…」

姫坂はマーラと素戔鳴尊を指差して「アルス、こいつらは？」

「この前戦つたマルバーよりも強い悪魔。この事件の犯人だ」アルスの説明に姫坂はなるほど、と呴いた。そしてポケットから一本の瓶を取り出した。

「ようするに敵だな」

姫坂はリバイスで剣を作り上げて構えた。マーラは呆れたように目

を閉じた。

「ヒメザカユキネ…だね。ルシフェルの事が好きな人間の女の…。
可愛いわねえ」

マーラの言葉に顔を朱に染めてあわてる姫坂の横でアルスは「へえ…お前も何かしらに対する感情つてあるんだな」

マーラは相変わらず目を閉じたまま「悪魔も多少の情ぐらい持つてるよ。君はその数値が大きすぎるだけ」

「さあ、どうするんだ？君は私達と一緒についてくるの？もしついてこないなら…」マーラは素戔鳴尊に、生徒たちが逃げた先を指差した。素戔鳴尊は不気味に笑い、アーマーンに声をかけた。

「ねえアマン…」
「ご飯の時間だよ」素戔鳴尊がアーマーンに声かけると、アーマーンの口からよだれがたれた。

「まで…やめてくれ！」

「そんのは選択肢はない。来るか来ないか。殺すか生かすか。それだけさ」マーラが言つと、素戔鳴尊がアーマーンを走らせた。

「アルス、この女は頼んだぞ」

姫坂が素早く動き、アーマーンを切つた。アーマーンの巨大は先決と共に若干よろめく。

「あ、エサだ」素戔鳴尊が笑う。

「エサはお前の方なのだよ、変態悪魔が」

その数メートル先、アルスが静かにたたずむマーラを睨んでいる。

「私達を倒す…。なんて選択肢はないよ」

「人生の選択肢なんか自分で決めるさ」

アルスは体中に魔力を充実させた。

アルスの怒りを表すようにキャンプファイアが爆発し、再び燃え上がつた。

「人生の選択肢なんか自分で決めるさ…かあ。カツコイイしひれるね～」

マーラは表情一つ変えず、心のこもっていない冷たい声でアルスの言葉を称賛した。アルスはどうせ嘘だらうと思い、相手にはしない。それよりも隣で悪魔と戦っている姫坂が気になつてしまつがなかつた。いくら数々の戦いを繰り広げ、戦闘に慣れてくれた姫坂でも自分よりも強い悪魔と対等に戦えるとは思つてもいなし、到底勝てるとは思えない。下手をしたら彼女は死んでしまうかもしない。そう考へるとどうしても戦いには集中できなかつた。

そんなアルスを見て悟つたのかマーラは鼻で笑つた。

「ルシフェル…？君、あの人間の事が気になつてるんだね？優しいなア、自分も絶対的不利な状況に置かれているのに他人を氣づかうなんて…。でもそんなの続けてたら君はいづれ死ぬよ？」

マーラの台詞はアルスの心に突き刺さるものばかりであつた。はつきり言えば凶星。アルスはマーラの巧みな心読術と話術にとらわれつつあつたのだ。

アルスはマーラの言葉には無言だつた。返せばもつと深みにはまり、彼女の思惑通りに事が動くと考えていたからだ。

「…自分の都合の悪いことは無視か…まあ無理もないか？」

アルスが返さないことを分かつてゐるマーラだが、あいかわらず一人で話し続ける。そんなマーラの足元に沢山の蛇がまとわりつきはじめていた。草むらからぞくぞくと姿を現し、地面をはいながらマーラの足を伝つて登つていく蛇たちにアルスは気付いてはいない。

「ほら、たとえば君。向こうに夢中で

マーラの足から登つた3匹の蛇がマーラの腕をはい、手にたどり着く。

「私のこの行動にも気がつかなかつたでしょ？」

マーラの言葉が終わると同時にマーラの手にまとわりついていた蛇は一斉にアルスに飛びかかった。アルスは驚きつつも魔力で風を作り上げ、蛇たちを吹き飛ばした。飛ばされた蛇は夜の闇に消える。「ちなみに今のは毒のない蛇で、噛まれたら痛いけど死なないよ。でも今私についている蛇の中には猛毒をもつてゐる蛇もいるからね。安心しちゃだめだよ?」

マーラの服の中から蛇が一匹、によろりと姿を現し、マーラの方でとぐろを巻いた。口からは長い舌が伸びてゐる。

「蛇を使った攻撃か?」

アルスがようやく口を開いた。

「なら俺は姫坂と開発した新しい武器を使わせてもらつよ、この機会だしな」

アルスはかすかに笑つた。炎に照らされてその笑みは不気味なものになつてゐたが、マーラはどうとも思わない。むしろアルスの反撃を楽しみにしていた。主人公の敗者復活、早すぎる気もしたが、楽しみだつた。

*

アルスが戦いといつよりも会話をくり返してゐる少し先で姫坂は使いたい魔アーマーンと素戔鳴尊との戦いで、圧倒的な力の差を感じ始めていた。

自分の攻撃はすべてアーマーンに当たり、その攻撃によつて出来た傷はすぐに修復してしまつ。以前アルスが言つてゐた「悪魔は傷の治りが早い」という理屈と同じであつと姫坂は思つてゐた。それに対し、アーマーンと素戔鳴尊の息の合つた技で姫坂は次々とダメージを蓄積され、片腕はもう動かなくなつてゐた。腹部にも鋭い痛みがあり、呼吸も困難になり始めていた。あまりの危機に、陽菜に変わらうとするが、アーマーンの動きは巨体に似合わず俊敏であるためにその隙もない。

「やばいな……」

姫坂は小さくつぶやいた。腕にはもう剣をふるう力も残っていない。素戔鳴尊はアーマーンをなでながら「おとなしくえさになつたらどう? 君みたいな若い女の子の肉はアーマーンの好きな肉ランキングのベスト3に入るくらいだからこの子も喜ぶぜ?」

「断る……私の肉はまずいぞ……」

姫坂はばれないうにラムネ菓子をポケットから取り出した。今のうちならば陽菜に変われると思ったからである。

アーマーンの口から象のような鳴き声が響いたかと思うと、その巨体で姫坂を跳ね飛ばした。姫坂の手からラムネ菓子がこぼれおち、姫坂は木に叩きつけられた。木に叩きつけられたときに体中に鈍い音が響いた。

「おー敵が何かしようとしたのを察知したのか。偉いぞアーマーン!」

地面に倒れこんだ姫坂の目はひどくうつむきになっていた。目の前はぶれ、意識はもう切れかけ。姫坂は死すら覚悟した。もう私は死ぬ、この悪魔に殺され、このバケモノのえさになる。思えば幸せなのか幸せでないのか分からぬ人生だった。アルスと出会えたことで……。

「あ……」

姫坂は最後の力を振り絞つて声をたす。

「……ある……す……たす……け……て……」

姫坂の最後の努力もむなしく、アーマーンがその巨体でこちらに突進してくるのがかすかに見えた。聞こえないか……。姫坂はあきらめて目を閉じた。ごめんねアルス……心で呟きながら。

突然、鈍い音が響いたかと思うと、今度は何か重いものが倒れるような大きな音が姫坂の耳にはいった。だがもう目を開く力すら残つていない。

姫坂は誰かに抱き起こされた感じがした。温かい腕、どこかで覚えがあつた。

死ぬな姫坂! 賴む死なないでくれ!

もう意識のなくなつた姫坂にアルスが叫んだ。その腕の中では一人の少女が血だらけで眠つてゐる。

「――ニイ！ こいつ頼んだア！」

アルスは近くに居た一二三に姫坂を託した。血まみれの姫坂に一二三はおびえて一度断つたが、アルスの切実な目に悩まされ、承諾した。姫坂を抱えて一二三は生徒たちの逃げた場所へ向かう。

「さて、とうとう氣になるものもなくなつた」

アルスは倒れこむ一人と一匹に視線を向けた。

「マーラア：どうしたの？ 突然吹つ飛んできたけど」

素戔鳴尊が頭を片手で押えながら立ち上がつた。マーラは右腕を押さえながら立ち上がる。

「分からぬ……。あいつの持つてゐる剣をよけたと思えばいきなり吹き飛ばされた。くう……右腕が痛い……」

アルスは地面に突き刺さした剣を抜いた。リバイスで作り上げた剣に魔力がまとい、朱色に鈍く輝いている。

「回復はさせない」

アルスは起き上がり構えようとした一人に剣を斜めに振り下ろした。振り下ろした剣から斬撃が飛ぶ。一人はかわしたが、アルスはすぐに次の攻撃に移る。

手のひらで作つた魔力を玉にし、一人に向けて放つと、すぐに剣を振り下ろして魔力の弾を切つた。切られた魔力の弾は一つに割れ、マーラに当たつた。素戔鳴尊はうまい具合にかわしたが、その後ろに居たアーマーンに攻撃が当たり、アーマーンが悲鳴を上げる。

「よくもアーマーンにイ……許さない！」

素戔鳴尊の背中から悪魔の翼が生えた。腰から黒い尻尾が伸びる。

素戔鳴尊は獣のように叫んだ。爆風のような風が吹き、木々がメキメキときしみ、キャンプファイアの火が消えた。辺りは暗闇に包まれるが、その中で素戔鳴尊の目が赤く輝いている。

素戔鳴尊は声をあげながらアルスに殴りかかつた。アルスはそれをよけ、剣で素戔鳴尊の腹を突き刺した。鮮血が飛び散り、素戔鳴尊

は悲鳴を上げる。

「ムキになつて心を乱したら戦いは負けだぜ。ここで学んだ！」

アルスは素戔鳴尊を蹴飛ばした。素戔鳴尊は吹き飛ぶが、アーマー^ンが吹き飛ぶ素戔鳴尊の体を自分の身を盾にして止めた。

「まあこいつはまだまだガキだからね……。シッダールタの生まれる前からいた私とはキャリアが違うんだ」

「えらく冷静だな」

「そりやあかの仏、ガウタマ＝シッダールタと戦つたんだよ？ 冷静さを持つていないとあの男には勝てない」

アルスは剣を振り上げ、振り下ろした。二つ斬撃が飛ぶが、マーラはかわす。

「…本気で戦うのも悪くはないかもなね…」

マーラは不気味に笑つた。

「どうぞ！」勝手に、とアルスが言つと、マーラの身体が不気味に「う」めいた。

マーラの身体は少しばかり大きくなり、身体は黒く変わつていぐ。マーラの背中には大きな悪魔の翼が生え、筋肉が発達していく。完全に姿の変わつたマーラの身体はアーマーンよりも大きな獣になり、翼をはやし、筋肉が盛り上がり、四足歩行になつていた。大きな目がアルスを睨んでいる。

「あー… やつぱり変身しないでほしかつたな」

マーラの大きな鳴き声を出した。象やライオンなど、沢山の動物が混ざつた鳴き声が闇にひびき、木々が倒れた。その鳴き声は避難場所まで響き、避難場所の窓ガラスが次々と割れた。生徒たちは鳴き叫び、恐怖におののく。

アルスは衝撃波に吹き飛ばされないよう剣を地面に刺して耐えていた。鼓膜が破れそうな爆音に頭が痛む。

「どう？ 私ノ姿は？」

「キモイな、前みたいな少女に戻つてくれよ、さつきの方方が可愛いぜ」

「まあ、まだ最終形態じゃないガナ」

「へえ、いくつも変身できるのか？ゲームのラスボスみたいだな」
マーラは高く飛び上がり、アルスに飛びかかった。アルスはかわすが、マーラが地面に降り立つた時の風で吹き飛ばされる。

木に足をつき、アルスは飛び上がった。その背中にはマーラ達とは違う、羽根のついた真っ黒な翼が生えている。

飛び上がったアルスはマーラの頭上で剣を構え、急降下した。剣は頭に突き刺さり、血が吹き出る。

「あつ、目がつ…」

血で前が見えなくなつたアルスに蛇がまとわりついた。アルスは急いで払うが、かまれてしまつた。

「残念ダつたね！その蛇ハ猛毒もちダよ！」

マーラが激しくその体を振り、アルスを落とした。地面に落ちたアルスをマーラの手が叩きつけた。

アルスは自分の腕と肋骨が折れたのを感じた。この重症では修復には時間がかかる。

アルスは剣でマーラの手を突き刺した。マーラは悲鳴を上げて手を挙げる。アルスはすぐさまその場から離れた。

そんなアルスにアーマーンが突進した。

鈍い音と共にアルスの口から血が飛び散る。

アルスは意識が飛びかけたが、すぐに体制を取り戻し、アーマーンを切つた。アーマーンは多量の血を飛ばしながら二つに割れた。マーラの攻撃をいち早く察知し、アルスはすぐにその場を離れた。だが、逃げたアルスの背中に鋭い痛みが走る。

アルスの後ろから素戔鳴尊が拳をつきたてていた、拳はアルスの背中を突いている。

アルスは無理やり身体をねじり、素戔鳴尊の腕を切つた。素戔鳴尊は悲鳴を上げてその場に崩れる。

「素戔鳴尊！おまエは早く帰レ！オまえは邪魔！」

マーラの大きな声に素戔鳴尊は舌打ちをした。

「嫌だ！アーマーンのかたきを取る！お前こそ邪魔だ！マー
それはあまりに突然だつた。

マーラは拒否した素戔鳴尊をたたきつぶした。マーラの手は深く地面にめり込み、その周りに大量の血が飛び散つた。マーラが手を離すと、その下では素戔鳴尊がグシャグシャに潰れて死んでいた。

「ひでえ…仲間を…」

「邪魔ダといつタはずダよね」

驚くアルスをマーラが睨む。アルスはすぐさま空を飛んでマーラの上に移動した。

「逃げてモ、無駄ダ！」マーラは大きな翼をはばたかせて飛んだ。アルスはすぐに逃げるが、マーラは素早く追いつき、アルスをたたき落とす。

「身体が…上手く動かない…」

地面にたたきつけられたアルスは小さくいつた。マーラはその言葉に笑つた。

「ドクが回つてキ坦んだよ、もつジキ死ぬ」

アルスの意識は遠のいていった。そんなアルスにマーラは言葉を投げかける。

「私ト一緒にコれば治ス。そうでなければこのバで殺ス」

アルスは答えなつかつた。そんなアルスにマーラはうんざりしたのか何も言わず、アルスに突進した。

アルスがなんとか身体を起こした時だつた、マーラの身体が空中で止まつた。アルスがみえたのは顎ひげと翼を立派に生やした悪魔。

「マーラ、作戦は終了だ。素戔鳴尊を殺したお前は悪魔殺しの罪を背負つた。お前を魔界に連行する」

マーラは驚いた。そして身体を震え上がらせた。魔界の唯一のルールを思い出し、それを破つてしまつたことだ。

「イヤダ！私はア！ワタシはあ…」

叫び、暴れるマーラ。だがその身は突然現れた翼のはやした悪魔が作り上げた赤黒い穴に吸い込まれて消えた。

暗闇に沈黙が走る。

「助かつた…」

アルスはその身を地面に倒した。
空には満天の星空が広がっている。
雲のない綺麗な空だった。

第11stage 毒されし悪魔

戦いの後、大けがを負つたアルスは合宿場所から病院へ緊急搬送された。アルスの傷は悪魔の力である治癒能力ですぐに治す事が出来るために、病院に行かなくてよいのだが、当の本人は気絶していた為、何も抵抗が出来なかつた。

ちょっとピンクがかかつた白い壁に囲まれた部屋のベッドで目覚めたアルスは左手で目を擦り、目やにを取つた。

そして、その時に自分の体の異変に気がついた。

異変の正体は右腕だつた。アルスの右腕は力無く下がり、いうことを聞かないのだ。全く動かない右腕はまるでそこに付いているだけの物体であり、自分の物では無いようである。

「なんで右手が・・・？」

アルスは誰かに助けを求めるよと、左手だけで何とか起き上がり、ベッドから降りた。麻酔のせいかふらふらする。

おぼつかない足取りでドアまで移動し、外へ出ると、長い廊下が続いていた。見舞い客がちらほら見える。「こらこら、勝手に動いちやいかん。何かあればナースコールを使ってくれ」

アルスが声の聞こえた方向に視線を傾けると、立派な白い髪をあごに蓄えた医者らしき老人が2人のナースを連れて立つていた。

アルスは謝罪をした後、医者に右手についてきいた。すると、医者

は首を横に振つた。

「神経系の猛毒が回つていてな、おそらくだが……」

言葉を詰まらせた医者を見て、アルスの頭は真っ白になつた。

「使えないのか……？」

医者は頷いた。

「そんな……」

アルスは体に力が入らなくなり、壁伝いに床に座りこんだ。絶望や悲しみよりも驚きと戸惑いが強く、不思議と涙は出ない。

利き腕である右手を失つた。これから戦うであろうアルスにとって、それはあまりにも痛すぎる出来事だった。

これと同時刻、アルスの病室の一つ下の階では、姫坂が沢山の機械に繋がれていた。姫坂は合計十五ヶ所の骨折を負つており、動く事が出来ず、天井のシミをもう何時間も見つめている。時折くる痛みにも、もう慣れてしまった。

（アルス……アルスはどうなつたかなあ）

姫坂が眼を閉じ、眠りうとした時、病室に若い医者が入つてきた。首からぶら下げたペンを左右に揺らしながら入つてきた医者は姫坂に視線を向けたが、目が合つてしまつたので、すぐに姫坂のカルテ

に目線を変えた。

「君は・・・今月2回目の緊急入院だね。いくら英雄だからって無理はいかん、そのうち死ぬぞ」

医者はカルテをペラペラとめぐり、姫坂を見た。

「あと、残念なお知らせだ。君のお兄さんの明くん、彼の右手に神経毒が回っていて、おそらくだがもう動かせない」

医者はためらいもせずにさらりと言つた。突然告げられた事実に、姫坂は眼を見開いて驚いた。

(そ・・・そんな・・・。アルスが・・・)

姫坂が啞然としている前で、医者は時計をちらりと見ると、いけない、と呟き、早足で立ち去つていった。この後に控えている当直に遅刻しそうになつたからだ。

医者が立ち去つてすぐに、扉が再び開いた。扉を開けて入つてきたのは、先程まで上の階にいたアルスだった。

「姫坂・・・?喋れるか?」

姫坂が小さく首を横に振ると、アルスは姫坂に近づき、手を握つた。姫坂が頬を赤く染めて恥ずかしがつたが、アルスは表情一つ変えず、声も出さない。

「これで少しは治つたはずだ。自然治癒力を上げたから・・・」

アルスは若干、口元を緩めて姫坂を握る手を離した。姫坂は自分の口に付いている呼吸器を外し、大きく深呼吸をした。

そしてアルスの顔を見て、「ありがとう」と礼を言い、上体を起こした。

「まだ完全に治したわけじゃないからな、無理するなよ」

「いや、これぐらいは大丈夫。それはそりと、アルス、君、右手が・・・」

「ああ、使えなくなつちました。多分、マーラの力だ」

「治せないのか?」

アルスは首を横に振つた。「わからない。多分・・・この世界じゃ少なくとも無理だ・・・」

「この世界・・・?」

「今ここにいる世界だ。人間界、下界って言つたりする」

「つまり下界じゃない世界。・・・魔界?」

「そう、人間界に治す薬が無くて、魔界であるマーラが生み出した毒なんだから魔界には血清があると思つ。多分な・・・」

「なら魔界に行つて薬を・・・」

アルスは、いや、と首を振つた。

「もし俺が魔界に行けば、親父に見つかる。魔界は親父の支配下に当たるからな。見つかってはまず帰つてこれない」

アルスは右腕を押さえて、「右手も使えないんだ・・・戦えるとは思えないしな」

アルスの言葉が終わると同時に、時計から音楽が流れた。12時を伝える陽気な音楽が静かな病室に響く。

姫坂はシーツを握りしめて顔をしまらせた。

「私が

「却下」

姫坂はまだ何も言つていないと大声を出すが、アルスは吐息をつながら、

「私が行く、だろ？ 駄目だ、あまりにも危険過ぎる」

アルスはこの後、この前の戦いの事を例に上げ、姫坂に魔界では力が通じない事を説明した。最初は反論していた姫坂も次第に頭を縦に振るようになり、最後には諦めて布団の中に頭を隠した。

「本当に行かないな？」

「つるやーー誰が行くか」

布団の中で叫ぶ姫坂に、ため息を一つ漏らしたアルスは無言で部屋を立ち去った。もとより、姫坂の傷を治しに来ただけのアルスに長

居する必要など無かつた。アルスが居なくなつても、しばらく姫坂は布団を被つたまま黙つていたが、アルスの足音が聞こえなくなると、布団からゆっくりと出た。

「・・・行くか。なんとしてでも場所を聞き出さなきや」

器具を外した姫坂は、タンスからとりだした制服に着替えると、こつそりと病室を出た。

病室を出た姫坂は、鋼鉄の扉をぐぐり、長い階段を下り、暗く長い廊下を進んである部屋にたどり着いた。姫坂は扉を開けて、部屋を見渡しながら、外崎の名前を呼んだ。一回目は返事が無かつたが、二回目は姫坂から向かつて右にある大きめの扉から返事が聞こえた。

「

「その声は姫坂ですか？」

「ああ、私だ。ちょっと聞きたい」とがある

「お前が私に？不思議なこともあるものですね」

「私も貴様にはだけは貸しを作りたく無い、だが今回だけは特別だ」

姫坂はいつまでも姿を現さない外崎を警戒しながら部屋の中心まで歩き、声の出所であるドアを睨みながら、

「外崎、魔界に行く方法を知らないか」

姫坂の言葉に外崎の返事は無かつた。だが、その代わりに外崎の声がするドアだけが無言で開いた。

姫坂は万が一を考え、リバイスで拳銃を作りだし、ポケットに忍ばせた。

ドアの先は、図書館のような場所で、数えきれない本が隙間無く本棚にしまわれており、床には入り切らない本が積んである。

姫坂は本の山を避けながら、

「どこだ？ 外崎」と言った。しかし今回も返事のみで姿は現さない。そんな外崎に姫坂は呆れ半分、怒り半分に、

「いい加減姿を現せ。隠れんぼをするつもりはないぞ」

「ここに居ますよ」

突然、外崎は姫坂の後ろに現れた。びっくりした姫坂は思わず拳銃を外崎に向ける。

「魔界についてですかね？ ちょっと良じ本がありますよ。ついて来てください」

外崎は拳銃を全く気にせず、姫坂を追い越した。姫坂は拳銃をポケットにしまい、その後ろをついて歩きだした。

外崎は歩きはじめてから本棚を四つ越して、右に曲がった所にある小さな部屋で足を止めた。部屋に入った姫坂は念のため扉は閉めなかつた。

「ここに・・・違つ、違つ、あつた。これですね、貴方が知りたい

情報の乗っている本は

そう言つて外崎が姫坂に渡したのは古ぼけて茶色に変色し始めた大きな本。表紙には、姫坂の読むことが出来ない文字が書いてある。

「これはアクラハイル様が生前手に入れた魔界の本。中は魔界での言葉が使ってありますが、アクラハイル様が訳を書かれたはずなので読めると思います」

外崎の言うとおり、本はすべてが英語で訳が書いてあった。古ぼけているせいか、時折字がにじんでおり読めないところもあったが、姫坂は目を凝らして読んだ。そしてあるページを見つけて、口元を緩めた。

「その顔、どうやら見つけたみたいですね」

「ああ、見つかった。それと、この本…貰つてもよいか

「私にはもう必要のない本です。もしあなたが必要とするならば、持つて行つてもいいですよ」

姫坂はこの時初めて外崎に礼を言つた。そして部屋を飛び出して走つて行つた。

外崎はその姿を手を振つて見ていた。

*

姫坂は本の情報の通り、夜の0時に街一番の教会に忍び込んだ。真つ暗な聖堂に響く讃美歌とオルガンは神聖というよりは不気味に近

く、背筋に寒気が走りっぱなしであった。こんな気持ちではいけない、と姫坂はゆっくりかつ深い深呼吸をして、本を開いた。月夜に照らされた文字は赤く輝いている。輝く文字の明かりを頼りに、文字を読み切った姫坂は、中心にある大きな聖母マリアの像の前に立ち、本を置いた。そして懐から、病院で盗んできたアルスの血液が入った試験管を取り出して、その血で魔法陣を描いた。

「麗しき神よ、この迷いし子羊を……」

姫坂が本の通りに祈つていると、突然「誰だ」という声と共に入口に付近にあつた扉が開き、神父が出てきた。姫坂は舌打ちをして祈りを続ける。

「麗しき神よ、この迷いし子羊を貴方のもとへ導きたまえ。麗しき神よ、この迷いし子羊を貴方の元へ導ひ……」

囁んだ、と姫坂は心の中で叫んだ。誰かがいる事を分かつた神父は早足で、姫坂に近づいてくる。

「麗しき神よ、この迷いし子羊を貴方のもとへ導きたまえ。麗しき神よ、この迷いし子羊を貴方のもとへ導きたまえ」

姫坂が祈り終えると、手に持つているアルスの血液が月光に照らされ輝き始めた。姫坂はすぐに試験管の蓋を開けて、手に血液を垂らすと、その赤黒い血液を飲み込んだ。

血液がのどを通つた瞬間、魔法陣は輝き、姫坂を包んだ。

光に包まれた姫坂は、神父が手を伸ばしたと同時に、光と共に消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8572x/>

Lostpowers2

2011年11月17日19時56分発行